雄山中学校校歌に寄せて ―校訓制定―

校長　高瀬知郎

【雄山中学校の宝】

本年度四月、本校に着任した際に、強く心を動かされたものがいくつもあります。

まず、目を奪われたのが間近に雄々しくそびえる立山連峰。そして、春爛漫の陽光の中、競うように咲き誇るモクレン、コブシ等の花々。学校を取り巻く自然環境のあまりの豊かさ美しさにため息が出るほどでした。さらに驚いたのは校舎設備の目を瞠る立派さです。平成九年竣工、築二十四年の歴史を刻むたたずまいは、立山連峰と対峙する「群峰」そのもの。立山町に唯一つの中学校として、その存在を際立たせています。優美なモニュメントが建つ広大なレンガ敷きの前庭、無垢材をふんだんに使った木の温かみのある教室と廊下。どこを見ても上質な建材を用い贅を尽くした富山県随一と思えるほどの校舎からは、立山町民の雄山中学校に寄せる愛情と期待がひしひしと伝わってくるようでした。そして、この最高の教育環境の中ですくすくと育っている、素直で礼儀正しくがんばり屋の子供たち。どれも雄山中学校の「誇り」であり「宝」であると感じたものがあります。それは、昭和三十五年十一月制定の校歌です。昭和を代表する歌人木俣修作詞、平山康三郎作曲の六十年間歌い継がれてきたこの校歌、校長室にあった創立五十周年記念誌「銀嶺」を紐解いてわかったのですが、実は二代目となる新校歌でした。それまでは、昭和二十三年十一月に制定された「旧校歌」を歌っていたのです。

もう一つ、これぞ「雄山中学校の宝」と感じたものがあります。

【旧校歌（昭和二十三年制定）】

昭和二十二年の創校から一年八か月後に誕生した旧校歌は、創校二か月後に第二代校長に就任された佐藤美雄先生の作詞、富山大学教授（声楽）の小澤慎一郎先生の作曲によるものでした。創校はしても雄山中学校としての校舎は存在しなかったため、中学生は五百石小学校、下段小学校など五か所に間借りして分散授業を受けていました。その子供たちが統一校舎で学ぶために新築された、県下最大といわれる新校舎の落成式（十二月一日）に合わせてつくられたものと考えられます。歌詞を紹介します。

一　越の鎮めの立山の　気高き姿仰ぎつつ　巍然とたてる我が母校　熱血たぎる若人は　永久に時代を導かん　ああ雄山の健児　我等

二　流れも清き常願寺　不断の姿のぞみつつ　誠の集い我が母校　希望に燃ゆる若人は　眞理の岸に進まなん　ああ雄山の健児　我等

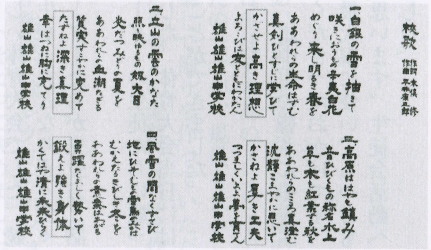
三　新川平野の果しなき　稔りの姿眺めつつ　和み睦める我が母校　純情溢る若人は　理想の郷土うち樹てん　ああ雄山の健児　我等

創校二か月後に就任され、実質の初代校長と思われる佐藤美雄先生の、新生　雄山中学校に寄せる情熱と期待、そして新しい時代を迎えた清新の気が伝わってきます。残念ながら楽譜が存在せずメロディーは分かりませんが、戦時中の苦しい生活を耐え抜き、新しくできた雄山中学校に通い始めた若者達が、どれほど喜んでこの校歌を歌ったことでしょうか。当時の在籍生徒一、〇八七名が落成式で初めて講堂に集い、声を合わせて歌いあげる姿が目に浮かぶようです。皆さんの大先輩（現在八十九歳～七十五歳）は、十三年間、この旧校歌とともに中学校生活を送っていたのです。

【新校歌（昭和三十五年制定）】

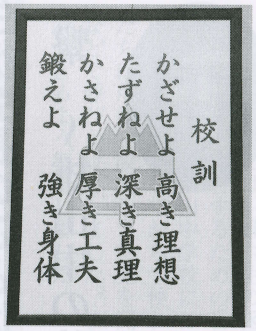
なぜ十三年間歌い継いできた校歌に代わる新しい校歌を創ることになったのか、その謂れについての記述は記念誌の中にありません。作詞の国文学者、木俣修氏は、宮内庁御用掛として昭和天皇の和歌指導をされたほどの歌人ですが、昭和九年（二十八歳）から昭和十八年（三十七歳）までの九年間、現在の富山市蓮町にあった旧制富山高等学校に教員として勤務していました。富山の地を離れて十七年になる木俣修氏に、旧制高校の教え子にあたるどなたかが依頼したものと思われます。当時五十四歳になっていた木俣修氏は、思い出深い富山（立山）の風物を思い浮かべながら作詞をされたことでしょう。

この新校歌は、四季折々の立山の自然を織り込みながら、若い中学生に心正しく健やかに成長してほしいという願いが情感豊かに表現されたすばらしい校歌です。文語独特の硬質な表現と優美な和語との組み合わせによる流麗な文体。さすがは日本語の達人のなせる技です。「《春》まず人生の目標となる『高き理想』を掲げよ。そして《夏》『深き真理』を求めて謙虚に学び、《秋》心静かに自らを省みながら夢を育て、《冬》鍛えた『強き身体』で未来を切り拓いていくのだ。」とそれぞれの季節にふさわしい表現で雄中生を力強く励ましてくれています。



【コロナ下の校歌】

昨年度来、世界中で新型コロナ感染症の流行が拡大しています。本校においても感染予防のため、合唱コンクールも卒業式も全校生徒が体育館に集合することができなくなっていました。学年ごとの合唱コンクール、卒業生と保護者だけの卒業式。今年度に入ってからも、入学式は新入生と保護者のみで、一、三年生は、教室でモニター画面を見てのリモート参加。どの式典においても飛沫感染を防ぐため、歌唱は極力避けることとなり、全校生徒が校歌を高らかに歌い上げるという機会そのものがなくなっていました。しかし、本校の校歌は、歌そのものに教育力がある優れた校歌です。なんとか全校生徒で「春夏秋冬」を通した校歌を歌いたいと願っていたところ、やっとその願いが叶いました。コロナの感染状況が下火になった二学期の終業式、なんと約二年ぶりに全校生徒が声を合わせて四番までを歌いきることができたのです。一、二年生にとっては入学後初めての経験でした。



【校訓制定】

多くの学校には「校訓」というものがあります。一人一人が学校での学びを通して人格を高めるための心の教えとなるもので、通常は創校時に校歌・校章等と同時に制定されることが多いのですが、本校にはなぜか校訓にあたるものがありませんでした。もしかすると、本校では校歌そのものが校訓の役割を果たしてきたのかもしれません。そこで、今年度、校歌の各連からそれぞれ一節を引き「校訓」としてまとめました。本校の目指す教育の方向性を統一するとともに、理想とする生き方を生徒・保護者・教職員が共有し、連帯して教育にあたる基盤にしたいと考えたのです。校訓の浸透を図るため、全教室の正面に新たに「校訓額」を設置しました。雄山中学校の「校歌」そして「校訓」が雄中生の愛校心と誇りをさらに高め、卒業後も永く人生の指針となって各人の心に息づいてくれることを願っています。